HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	開会挨拶
Author(s)	増田, 隆夫
Relation	第6回 人文・社会科学系研究推進フォーラム報告書 Ⅰ 講演の記録
Issue Date	2021-03-29
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/83481
Type	conference presentation
File Information	JF6_hokudai_1-1_Masuda.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP



開会挨拶

北海道大学　理事・副学長　**増田　隆夫**

北海道大学を代表して一言ご挨拶を申し上げます。

本学の大学力強化推進本部 URA ステーションが主催の第 6 回人文・社会科学系研究推進フォーラムにご参加いただき、誠にありがとうございます。

このフォーラムは、人文・社会科学系の研究に関わる研究者と URA、そして、事務系職員などが、よりよい研究推進の在り方をともに議論し、着実かつ新しい展開を目指して 2014 年に発足したものだと聞いております。

北海道大学は、明治 9 年に札幌農学校として開設して以来、今日まで理工系中心の総合大学として発展してまいりました。そのため、文系 4 部局の学部学生の割合は全体のおよそ 25%、教職員に至っては 16%でございます。このような理工系を中心とした北海道大学で、人文学・社会科学が主導するプロジェクトの可能性を考える本フォーラムを開催できることは大変意義深いものだと考えております。

皆様ご存じのとおり、近年、特に課題解決を目的とした研究プロジェクトに関する研究公募では、人文学・社会科学に関わる研究者の参画が求められている傾向にございます。現状では、自然科学主導のプロジェクト内のごく一部に人文学・社会科学系の研究者が関与する形が主流になっております。このような形が正常か否かは、プロジェクトに参画する個々の分野の研究者の人数ではなく、そのプロジェクトの方向性を決めている主体がどの研究領域なのかで判断する必要がございます。研究プロジェクトの多くは、将来の社会実装を求めています。つまり、技術が社会に実装され、恩恵を受ける一般の人たちが継続して利用する形でなくてはなりません。最終的に、プロジェクトの成果の優劣

は一般の人が判断することになります。社会全体が健全に発展するために必要な技術か否か、技術を社会にどのように組み入れるかについて判断できるのは人文学・社会科学系の研究者であります。そのような研究者が理工系の個々の研究シーズをつなげて社会にマッチングする形に仕上げて提案するプロジェクトも可能性があると思います。そのためには、日頃から人文学・社会科学系と理工系の研究者が交流を行うことも必要かもしれません。

このような考えから、本日のフォーラムは、「人社主導の学際研究プロジェクト創出を目指して」を主題としております。主題に関して回答を見出すため、本日のフォーラムでは多くの講師の先生方にご講演をお願いしております。総合地球環境学研究所の近藤康久先生、東京大学大学院法学政治学研究科の城山英明先生には基調講演を、京都精華大学人文学部の南了太先生、琉球大学人文社会学部の高橋そよ先生、本学大学院文学研究院の田口茂先生、大阪大学総長補佐・経済学研究科の堂目卓生先生、本学大学院保健科学研究院の山内太郎先生には事例紹介をお願いしております。先生方には、ご多用中にもかかわらず本フォーラムにご講演いただきますこと、深くお礼申し上げます。また、日を改めますが、ワークショップもあり、盛りだくさんなプログラムになっております。

本日は、URA や研究支援関係の方々のみならず、教員やファンディングエージェンシーの方々にもご参加いただいていると聞いております。複雑化した人間社会においてアカデミアができる一つの形として、複合型、学際型プロジェクトの形成があるとすれば、本日のご講演やワークショップを通じて、ご参加いただいた皆様が、それぞれ何らかの示唆を得る契機になれば幸いです。

最後に、本日のフォーラムが皆様にとって有意義なものになりますことを祈念しますとともに、本フォーラムを企画運営されておられます本学 URA ステーションの関係者に感謝を申し上げて、開会の挨拶にかえさせていただきます。ありがとうございました。